

平成 26 年度年次学術講演会特別セッション報告

学術講演会実行委員会

さる 2014 年 5 月 23 日，日本写真測量学会平成 26 年度年次学術講演会にて特別セッションが開催された。

セッションのテーマは，2013 年 11 月 G 空間 EXPO2013 にて開催された本学会主催のシンポジウム「G 空間における地球観測衛星の役割」にて，長幸平副会長（東海大学）が強調されていた「継続観測の重要性」に焦点をあて，

『地球観測衛星による継続観測の重要性を考える ～今後の社会貢献・ビジネス利用に繋がる継続的利用のあり方～』

とし，パネルディスカッション形式で行った。

本多嘉明氏（千葉大学）の司会進行により，はじめにディスカッションの導入 ([PDF](#)) としてお話いただき，続いて 5 名のパネリストからそれぞれ次の内容について話題提供いただいた。

前原正臣氏（内閣府宇宙戦略室）からは，我が国の地球観測衛星計画として，新たな宇宙開発利用の推進体制，宇宙基本計画の概要，戦略的予算配分方針に対する宇宙産業部会の意見案，政府系の地球観測衛星の開発・運用計画等，政府における地球観測への期待と位置づけについてお話いただいた。（[PDF](#)）

福田 徹氏（RESTEC）からは，地球観測衛星による社会貢献・ビジネス利用に向けて，世界各国の機関と比較した我が国の衛星とセンサの優位性とそれを踏まえた戦略，我が国の地球観測衛星計画と日本国内だけでなくアジア各国の利用者を取り込む戦略，地球観測データによるビジネスチャンス，民間業者との協調を推進するための方策についてお話いただいた。（[PDF](#)）

赤松幸生氏（国際航業）からは，民間における地球観測衛星データ利用ビジネスの実績と課題として，利用ビジネスの実績（防災，環境，インフラ維持管理，農業における事例紹介），利用上の課題（観測の継続性，データの入手コスト，海外展開），民間が描く地球観測体制の在り方について問題提議いただいた。（[PDF](#)）

竹内渉氏（東京大学）からは，大学における空間データの蓄積とニーズの観点から，大学が行ってきた地球観測の実績と日本国内外への貢献，地球観測の継続必要性と問題点，これからの地球観測に求められることについて，人材育成を含めたトータルな衛星利用についてお話いただいた。（[PDF](#)）

祖父江真一氏（TF コミュニティ事務局／RESTEC）からは，今後の宇宙開発体制の在り方に関する TF コミュニティについて，地球観測タスクフォースコミュニティの現状，欧米におけるオープン&フリー戦略と，海外における戦略から日本の戦略案に至る状況を説明いただいた。（[PDF](#)）

パネリストからの話題内容がたいへん盛りだくさんだったため、ディスカッションの時間を十分取ることができなかったが、会場からは限られた時間のなか、貴重な意見や質問をいただき、パネリストよりそれぞれ回答された。また、最後に、司会の本多氏より各パネリストからの話題の要点および参加者からの意見がまとめられ、次のレゾリューションが満場一致で採択された。

「地球観測衛星における日本の技術力は高く、とりわけアジア諸国の間ではブランド視されている。地球観測衛星がもたらす情報は、そのものが利益を得る手段ではなく、その整備すなわちインフラの上になされる経済活動の拡大こそがビジネス分野における我が国の世界貢献、ならびに我が国の宇宙産業の拡大に繋がると考えられる。とりわけ東京大学土木系をはじめとする日本の大学で高等教育を受けた留学生が帰国し、本国で然るべき立場について人が多数いるアジア諸国では大いにその展開の期待が持てることと、2050年に人口のピークアウトを迎えるアジア地域では環境問題をはじめとする諸問題が顕在化することが予想され、この事も相まってアジアにおけるこの分野の日本の貢献を確固たるものにできると考えられる。以上の事をふまえて引き続きG空間EXPOにおいても議論を続ける。」

以上の通り、今秋のG空間EXPOにて引き続き議論を行う予定であり、多くの方々にご参集いただければ幸いである。

文責：山下 恵